

## 9 英語

### コミュニケーションにおける英語を活用する力を高める学習指導 —タスク（探究的課題）を活用した総合型のアプローチ—

牧野 尚史

#### 本論の要旨

今までは文法規則や語彙、イディオムといった言語形式やトピック、テーマ、メッセージといった意味内容に焦点を当て、指導方法としてはPPP型の授業を展開してきた。

しかし、ここで課題となったのは、知識として習得したものを、即興性が必要とされるコミュニケーションの中で上手く活用できないということである。原因として、形式や意味内容に焦点を当てた指導になっていることが考えられる。一見、新しい表現を学習したその時は活用できているように見える。しかし、次に新しい表現を学習した時には、前に学習した表現が使えなくなることが多くみられた。

この課題を解決するために、生徒の自由なアウトプット活動にするための方法として、タスクを活用したアプローチを試みた。また生徒が使う表現をより豊かにするために、タスクを達成するための言語材料をインプットするようにした。学習が進む中で生徒が使う表現がどのように変化したかを検証し、タスクを活用したアプローチが生徒のコミュニケーションに効果があるかどうかを見てみたい。

キーワード PPP型の授業 言語機能 タスク

#### 1. はじめに

「英語を活用できる生徒を育てるために必要なことは何か。」これは授業をする上でいつも考えていることである。

中学校学習指導要領（平成29年（2018年）告示）解説には、「外国語の学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である<sup>1)</sup>」とある。つまり単語を覚えたり、文法を理解したりすることも大切であるが、それだけに重きを置くのではなく、身に付いた知識を実際のコミュニケーションの場面でどれだけ活用できるかが必要になるということである。では、実際のコミュニケーションの場面で活用する力とはどういうことか。それは、コミュニケーションをする際、「目的や場面、状況など」を意識した上で、「簡単な情報や考えを理解」したり、理解したことを活用して「表現したり伝え合ったりする」ことを即興的に処理することができる力のことである。

以前、自分がしていた授業を振り返ってみると「Do you like Japanese food? -Yes, I do. / No, I don't.」という表現を学ぶ場合、生徒に文法の説明をしてから、「like」や「Japanese food」の部分を変えて、いくつかのパターンを何回か練習をさせていた。その後、オリジナルの文を考えさせ、その文を使って、ペア

でお互いたずねて、答えるという活動を行ってきた。果たして、これで実際のコミュニケーションの場面で英語を活用する力が身に付くのであろうか。このような授業を3年間して生徒たちが実際に英語を活用する力をつけていたかと言われると、つけていたとは言い難い。語彙や文法規則といったことをある程度理解はしていたが、知識としての習得にとどまっていた。コミュニケーション活動の中で学習した内容を上手に活用することができなかったのである。学習指導要領が新しくなり、英語教育が大きく変化をしようとしている中、今までとは違ったアプローチをしていく必要がある。

学習した内容が単に知識としての定着だけで終わらせるのではなく、実際のコミュニケーションで活用できる力を身に付けさせるアプローチが必要となってくる。

そこで、本研究では近年、日本でも注目されているTBLT（Task-Based-Language-Teaching）の要素を取り入れてみることにした。コミュニケーションにおける英語を活用する力を高める学習指導として、タスクを活用した総合型のアプローチを試みた。言語形式と意味内容だけに焦点を当てた指導でなく、言語機能にも着目するようにした。それに加えて、定期的にタスクを課すようにして、学習した表現をどれくらい活用できているか、1年をとおして生徒の表現の変化を検証してみたい。



## 2. 研究の目的

以前していた授業の展開はPPP教授法と言われるものであると考える。PPPとは、Presentation-Practice-Productionのことを言う。Presentationとは、授業の導入部分のところであり、教科書に出てくる新出語句や進出表現の文法を確認する活動である。Practiceとは、正確さを高めるためのドリル的な活動であり、Productionとは、学習した表現を用い、意味に焦点を当てる活動である。このPPP教授法は、どちらかと言うと教師主導型の授業で、生徒は教師が提示するスキットや表現を使って産出活動をする。しかし、アウトプットとなるこの産出活動は、生徒が自由に表現するというより、どちらかと言えば、型にはまったものである。また、生徒がコミュニケーションをする前のPracticeの段階では、言語形式や意味内容といった正確さに焦点が当てられる。ドリルで正確さを高めるような練習したあとに産出活動をするために、生徒は「正しい表現をしないといけない」と思ってしまう傾向にあり、間違いを恐れるあまり、コミュニケーションが思うようにできないということもある。

間違いを恐れず、今ある言語材料や知識を使って、何とか伝えようとするコミュニケーションをさせるために着目したのが、タスクである。

タスクとはTask-Based-Language-Teachingのことで、近年注目を集めている外国語教授法である。この教授法は、生徒が単に知識を受け取るインプットだけの学習ではなく、インプットされたものをタスクという課題の中で英語を実際に使うことによって言語を習得していくとされるものである。以前のPPP型の授業は、コミュニケーションの中で使えるようにするために言語を学習するといった考え方があった。しかし、このタスク中心教授法はコミュニケーションの中で使っていく中で学んでいくという考え方である。

それでは、タスクとはいったい何なのか。具体的には、Skehan (1998) がタスクの要件として次の事柄を挙げている。

- 意味の伝達が中心となる。
- 何らかの解決すべきコミュニケーションの問題が存在する。
- 目的課題があり、その課題を達成することが必要とされる。
- 教室外の世界と何らかの関係がある。
- 評価は、タスク達成の成果をもって行われる。

つまり、タスクでは意味内容はコンテキストを重視しており、より実際のコミュニケーションに近い場面に結びつけようとしているのである。

このことから、最初にあった「英語を活用する生徒に必要なことは何か。」を、このタスク教授法を進める中で見つけてみたい。

## 3. 研究の課題および方法

タスク教授法を授業に取り入れるにあたって、いくつかの課題がある。

1つ目は、タスク課題設定の仕方である。タスクは実際のコミュニケーションにより近づけた場面設定で行われる。授業は教科書をベースに進めていく。教科書の内容を使い、どのように課題を設定するかが問題である。

2つ目は、タスクの難易度である。タスクをするときに、使う言語材料は決まっておらず、生徒が現在持ちうる知識を活用してタスクを達成するものである。本研究をする上で対象とする学年は1年生である。1年生ということは英語学習の初期段階である。持ちうる言語材料はそれほど多くないはずである。

3つ目は、評価の方法についてである。タスク教授法の評価方法は、タスク達成の成果を持って評価される。そのため、生徒が使う言語材料は自由である。コミュニケーションをとおして生徒が持ちうる知識を最大限活用してすればいいわけである。学習した内容をどれだけ活用できているかをどのように判断し、評価するかが問題である。

以上の3つの課題を解決すべく、以下の方法で本研究を進めた。

### (1) タスクの課題設定

表1 Lessonごとのタスク

L	タスク	形態
L1	簡単な自己紹介のやり取り	やり取り
L2	やり取りを交えた1分以上の自己紹介	発表
L3		やり取り
L4	京都校外学習のおすすめスポットベスト3を決める	発表
L5	身近な人(家族や友だち)のことを紹介しよう。	発表
L6		やり取り
L7	いろいろなスポーツを紹介しよう。	発表
L8	附属中学校生活を紹介しよう。	発表
L9	季節ごとの行事について紹介しよう。	発表
		やり取り
P3	大切なものを紹介しよう。	発表
		やり取り

※LはLesson, PはProjectの略



表1は単元ごとに設定したタスクである。タスクの形態としては、「やり取り」と「発表」の2つのパターンがある。これは、学習指導要領の「話すこと」の技能が「やり取り」と「発表」の2つの領域に分けられていることからである。それぞれのタスクの課題に応じたものになっている。またその「やり取り」や「発表」の方法も個人とするもの、ペアやグループとするもの、また個人対全体とするものなどがある。表2を見ればわかるように、各 Lesson に課題を設定してはいない。L2 と L3 は2つの Lesson で1つのタスクである。これは、自己紹介のタスクの中に聞いている人に質問をして「やり取り」をする内容も含んでいる。そのため、「Do you ～」の言語材料を学習する L3 も含めて1つのタスクを課すことにした。L5 と L6 も同様に、他人紹介をするタスクで ALT とのやり取りをする内容を含めている。このように1つの単元に1つのタスクではなく、学習する言語材料をもとにタスクをする時期は柔軟に設定するようにした。

表2 Lesson の内容と新出表現

L	内 容	新出表現
L1	あいさつ・自己紹介	I am～／You are～
L2	人やものの紹介	This／That is～ What is this? He／She is～
L3	好きなものの紹介	I play～／Do you～
L4	複数形や数のたずね方	複数形 How many～
L5	人や場所についてのたずね方	Who is～ When／Where do you him／her
L6	家族や友だちの紹介	三人称 Does he／she～
L7	いろいろなスポーツの紹介	can～ Can you～
L8	学校生活を紹介しよう。	be ～ing What are you doing?
L9	身近な年中行事についての紹介	過去形 Did you～

表2は教科書の各 Lesson の内容、そして、各単元で学習する言語材料の一覧である。本校で使用している教科書は三省堂、NEW CROWN ENGLISH SERIES New Edition1 である。授業は基本、教科書のシラバスに沿って進める。また既習項目をどれだけ活用できているかを知るために、本研究のタスクの課題設定についても教科書の内容を参考するようにし、単元ごとに課題を設定するようにした。

## (2) タスクの難易度

タスクの利点の1つとして同じタイプのタスクでも学習者のレベルに応じてその難易度を柔軟に調節できるということである。タスクの難易度を設定するにあたっては、目の前の生徒の学習スタイル、コミュニケーション態度や英語学習に対する意欲などを見て設定する必要があるが、英語学習の入門期の生徒たちに対しては、達成感を持ってもらいたいと考え、あまり難易度を高くしない方がよいと考えた。そのため、教科書の単元に出てくる内容に合うようなタスクを設定した(表2)。タスクをする前に、準備ができる時間も設け、課題の達成を気軽にできるようにした。さらに、難易度を上げるという意味で発表スタイルのみのタスクではなく、やり取りをする内容を入れるようにした。やり取りを入れることで生徒の英語を使った即興力を試そうというものである。以上のように、タスクの難易度としてはあまり高くせず、どの生徒も達成できるような工夫をし、「やってみよう。」「できた。」という動機付けや達成感を持たせるようにした。

## (3) 評価方法

タスクの第一の特徴は、パフォーマンステストである。また評価としてはタスクを達成するために教員が求める特定の文法項目を使用するかしないかは問題ではない。たとえ、教員が「この表現をつかってほしい。」と考えていたとして、実際のタスクの場面で生徒がそれを使わずに、違う表現を使ってタスクを達成したとしても評価に影響を与えるわけではない。しかし、実際は学習した内容をどれくらい活用できるのかは知りたいところである。タスクの定義としては、こちらが使用する言語材料を提示してしまうと、それはタスクではないというものであるが、今回の研究では英語学習の入門期の生徒を対象としていることもあり、言語材料を提示することにした。ただし、すべての言語材料を提示するのではなく、必要最低限の提示に留めるようにした。その上で単元のはじめにタスクの評価基準を示し、生徒がタスクまでに「なにができるようになっていのか。」を意識して学習に取り組めるようにした。さらに、タスクでは文法規則を正しく使えているか、正しい単語を使えているかといった「正確さ」に焦点をあてることよりも、「流暢さ」に焦点を当てることにした。

そこで、評価基準は2つ設定した。1つは、「タスクの達成度」(表3)である。評価基準とは別にタスクの条件(表4)を示し、その達成度によって評価するようにした。



表3 タスクの評価基準

判定	評価基準	
	タスク達成度	流暢さ(Fluency)
3	内容はタスクの条件を4つとも果たしている、自然な会話になっている。	長い沈黙や言い直しがほとんどなく(0~1回)、やり取りがスムーズにできている。
2	内容はタスクの目的を3つ果たしている、自然な会話になっている。	長い沈黙や言い直しがときどきあり(2~3回)、やり取りがスムーズにできていないところがある。
1	内容はタスクの条件を3つ果たしているが、会話が不自然になっている。	長い沈黙や言い直しが多く(4回以上)、やり取りがスムーズにできていない。
0	内容はタスクの条件を果たしておらず、会話が成り立っていない。	非常に長い沈黙のために、やり取りが全くできていない。

表4 タスクの条件

	タスクの条件
	Keyword：自然な会話
1	あいさつで始まり、あいさつで終わること
2	お互いの名前(フルネーム)を言い合うこと
3	お互いの出身地をたずね、それに答えること
4	状態を表す単語を最低1回使うこと (tired, hot, hungry, happy など)

2つ目は、「流暢さ」である。タスクを達成するために使用する言語は生徒にとってある程度自由度がある。文法を理解して規則正しい表現ができているかという「正確さ (accuracy)」を求めるよりも、どれだけの量を話し、自然な会話や発表ができたかを見る方がタスクの評価としては合っているように思う。以上、この2つの視点でそれぞれ0~3点、合計6点で評価するようにした。

#### (4) 研究の方法

##### ① プレタスクの設定

単元の最後にタスクを持ってくるようにした。1つの単元は多くて8時間とし、最後の時間がタスクをする時間として、それまでの時間はタスクを達成するためのインプットの時間と考えた。また単元の途中に本番前の練習として、プレタスクの時間を設定した。プレタスクとは、本番のタスクに似たようなことを事前に体験するというものである。プレタスクをする1番の目的は、「こういうことが言いたいけど、なんて言ったらいいかわからない」という経験をさせることである。そういった経験が次の授業からの動機づけになると考えた。

#### ② インタラクション

「タスク中心教授法は、Long (1980, 1985, 1996) の提唱する「インタラクション仮説」(Interaction Hypothesis) を、その主な理論的背景としている。インタラクション仮説によると、学習者は、最初は理解困難と思えるインプットでも、対話者と相互交流をする中で理解可能なインプットへとかえていけるとされる<sup>2)</sup>とある。タスクをするまでの授業内で生徒と教員間でタスクに使えるような表現を使ったインタラクションをするようにした。また訂正的フィードバックを行い、できるだけ多くのインプットを与えるようにした。生徒と教員が互いに理解するために意味のあるインタラクションをすることで、生徒のインプットの理解度を深め、言語習得を促すようにした。

#### ③ フォーカス・オン・フォーム

英語活用する力をつけるためのアプローチとして、タスクを活用することに着目した。タスクをするまでに、さまざまな形でインプットを与え、アウトプットとしてタスクを設定する。そんなイメージ(図1)でこの研究を進めた。そしてインプットの段階では、言葉に焦点を当てる。その段階で言葉が持つ3つの要素からインプットをした。1つ目はどのような単語や文法を使うかという言語形式である。2つ目は、何を伝えるかという言語内容である。そして3つ目は、それらの2つがコミュニケーションの中でどのような役割を果たしているかという言語機能である。どちらかといえば言語形式や言語内容

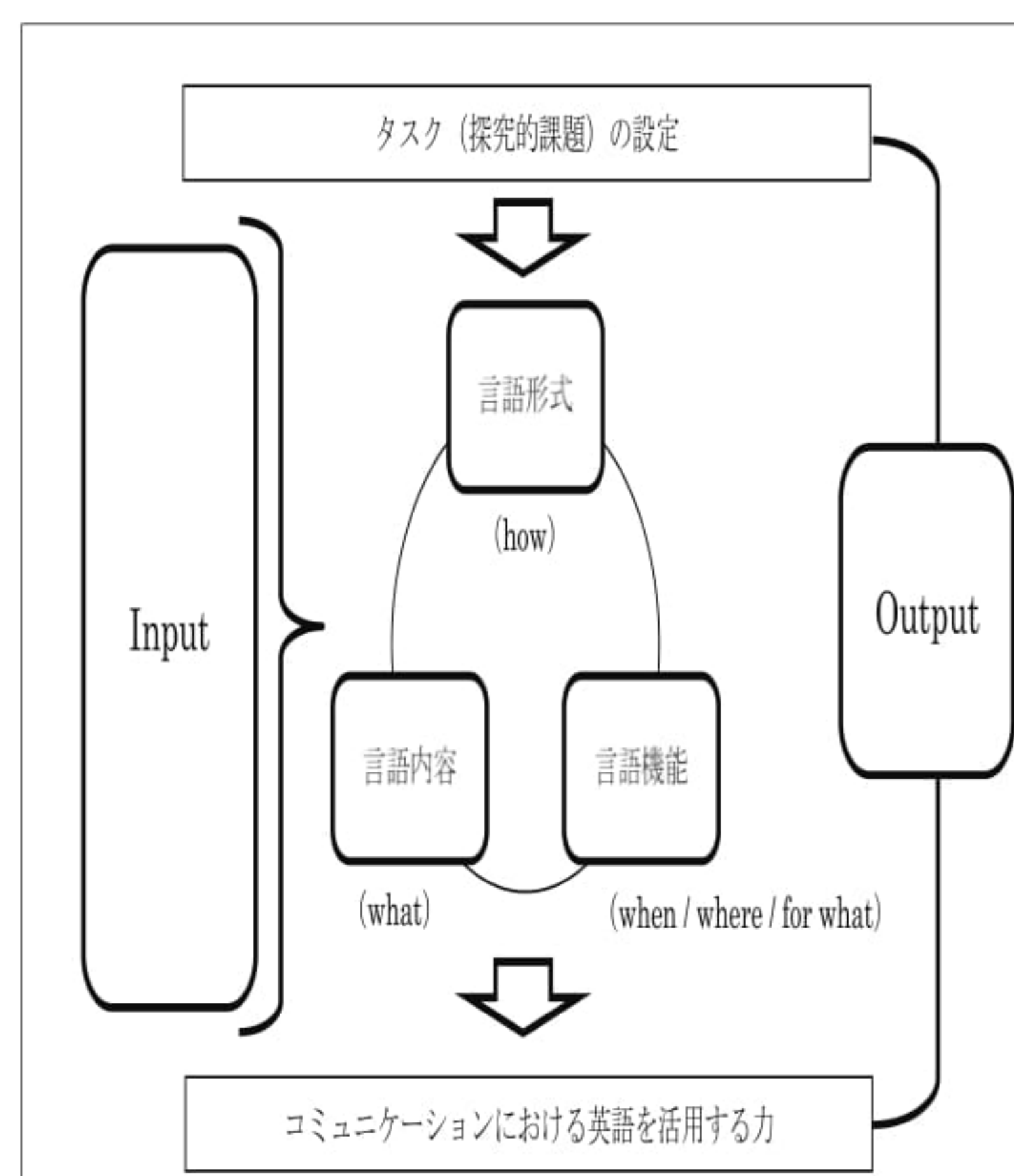


図1 英語活用へのアプローチイメージ



についてのみ学習をしていた点があったが、それらが「どのような場面」で「何のために」使われるのかという 3 つ目の言語機能についてあまり意識することがなかった。しかし、コミュニケーションの中、つまりは即興的な場面で英語を活用するには、この 3 つの要素をバランスよく学習する必要がある。そのため、この 3 つを意識したインプットをするようにした。

#### ④ 「話すこと」の抵抗をなくすために

言語とは、コミュニケーションの中で使いながら、そして間違えることで習得していくものである。間違えることなしに言語を学ぶことはできないのである。「話すこと」に抵抗がなくなるように、間違えることを恐れないということを常に伝えるようにした。また英語を話しやすい環境づくりのために、帯活動で **Picture describing** の活動をペアでする時間を毎時間するようにした。

### 4. 研究の検証方法

学習した表現をどれだけ活用できているかを検証するために、同じタスクを繰り返すことにした。1 年間のタスクをとおして、「紹介」というキーワードが多く見られる。L2・L3 後に行った「やり取りを交えた 1 分以上の自己紹介」タスクを 1 学期の終わりと 3 学期のはじめの 2 回した。また 12 月に滋賀県中学校教育研究会英語部会の調査で、「英語の書く力診断調査」を実施した。ライティング形式の調査で、テーマは ALT に自己紹介をする内容である。以上のスピーキングのタスク 2 回（7 月と 1 月実施）と「英語の書く力診断調査」のライティング 1 回（12 月）で自己紹介をする中で活用する表現にどのような変化が見られたかを検証した。また 3 学期のはじめにアンケートを実施し、生徒の「話すこと」に対する意識を調査した。

### 5. 研究のまとめ

自己紹介タスク「やり取りを交えた 1 分以上の自己紹介」で同じ生徒の発表とライティングの内容を比較し、学習した表現の活用にどのような変化が見られたかを見てみた。ここでは生徒の発話した内容を参考として紹介する。この 2 人はアンケートで「話すことがあまり好きではない」と回答した生徒たちである。またタスクの自己紹介にはやり取りの部分があるが、質問に答えている生徒の発話は省略している。また参考として、1 回目のタスクではメモを使ってもよいとしたが、2 回目はメモなしで発表をしている。

#### (1) 生徒 A

#### ① 自己紹介タスク（7 月実施より）

Hello. I am ～.  
Nice to meet you.  
Uh, I'm from Otsu.  
Ah, Otsu. Ah, I like Otsu.  
I like Lake Biwa.  
Lake Biwa is very nice.  
Uh, I play baseball.  
Do you play baseball?  
Oh, What sports do you play?  
I like reading books.  
Uh, I like Hiro Ayakawa.  
She is my favorite writer.  
Uh...Do you know...her books?  
Do you know Library War?  
I like 「僕とおじいちゃんと魔法の塔」  
It's...uh...very interesting.  
Uh...え～…  
By the way, I like mo...あつ watching movies.  
Library Wars. 007. But I don't like movie theater.  
I watch movie at home.  
Any questions?  
Thank you listening.

#### ② 自己紹介（英語を書く力診断調査より）

My name is Masato Kato.  
I like reading very much.  
I like Hiro Arikawa's books.  
I have nine her books.  
Her books is exciting.  
I want her books.  
I usually go to library at home.

#### ③ 自己紹介タスク（1 月実施より）

Hello. I'm Masato Kato. Nice to meet you.  
I'm from Shiga.  
I live in Shiga.  
I like Shiga.  
Shiga has Lake Biwa and many mountains.  
They are very beautiful.  
And Shiga has long history too.  
Shiga is...very interesting. I like Shiga.  
I like baseball too.  
I can play baseball.  
Uh...Can you play baseball?  
(続きは p6 から)



I'm...I'm...I'm a member of baseball team.  
 My position is catcher.  
 I use ah...my brain in this sport.  
 I eat many food for this sport.  
 But I don't like vegetables.  
 I like reading books.  
 I like Dragon rider.  
 Uh...Do you know this...uh..Do you know it?  
 .....It's very exciting. Ah...  
 Look at this picture.  
 He is Eragon, main character. He is (不明).  
 Uh...This is dragon...uh...Eragon's dragon.  
 He is riding dragon.  
 He can ride dragon.  
 He is very cool and strong.  
 This is Rubik's cube.  
 I'm into Rubik's cube.  
 But I don't...I don't play Rubik's cube very well.  
 These are newspapers about Korea.  
 I'm interested in Korea.  
 That's all. Thank you.

## (2) 生徒 B

### ① 自己紹介タスク（7月実施より）

Hello. My name is ～.  
 I from Shiga.  
 I am twelve.  
 I like animal.  
 I play tennis after school.  
 I have a two dogs.  
 This dog name is Ren.  
 And this dog name Mi.  
 It is very cute.  
 I...Any question?  
 Thank you.

### ② 自己紹介（英語を書く力診断調査より）

My name is ～.  
 I can pley tennis very much.  
 I cannot ...

### ③ 自己紹介タスク（1月実施より）

Hello. My name is Hitomi Shiga.  
 Nice to meet you.  
 I live in Otsu.  
 My birthday is August 21.  
 I am thirteen years old.

I like strawberry cake and roll cake.  
 I can play tennis.  
 I use my racket and shoes.  
 I like my sister very much.  
 She live in Thailand.  
 I have two dogs.  
 Do you have any pet?  
 Their name is Mi and Ren.  
 Their has gold hair.  
 Their has black and white hair.  
 They are very cute.  
 Thank you for listening.

ちなみに、上記の自己紹介タスクと英語を書く力診断調査の内容に関しては、生徒の発話（ビデオ録画を参照）したものやライティングしたものをそのまま再現している。

## (3) 考察

### ① 成果

成果の1つ目は、生徒の発話量が増えたということである。上記の1回目と2回目の自己紹介タスクを比較してみると2人とも1回目より2回目の方が発話量が多くなっていることがわかる。理由としては、1回目以降に学習した表現を活用できていることが考えられる。また1回目の内容にはなかった表現が2回目には2人の自己紹介に共通して見られるものがある。その内容は自分以外のものや人を紹介するものである。2回目の自己紹介タスクをするまでに、L6やL7で他人を紹介したり、スポーツを紹介したりするタスクを実施している。その時の内容を自己紹介のタスクにも活用できているということがわかる。その他にも1回目以降に学習した「can」や「複数形」も活用していることがわかる。

2つ目は、1回目よりも2回目の方がより流暢さがアップしたということである。その理由としては、1度しているからということもあるが、Lessonごとのタスクを重ねていることで、生徒が発表することに慣れてきているということが考えられる。自己紹介の1回目はメモを見てもよかったが、2回目はメモなしの発表だった。それにもかかわらず、これだけの量をあまり言葉をとぎらせることなく、話せていることは英語を使ってクラスの前で発表することに抵抗がなくなっている証拠であると思う。またタスクでは、文法や語彙の間違いを指摘しないようにしているので、生徒もある程度間違いを気にせず、自信を持って英語を使う



ことができているように感じる。

3つ目は、まとまりのある内容を意識するようになったことである。1回目は単文の紹介で1つのトピックを終える生徒が多く見られた。1つのトピックを2文目、3文目と内容を膨らませることができない生徒が多かったのである。しかし、2回目の自己紹介タスクでは1つのトピックに対して、2文目、3文目と内容を広げることができる生徒が増えた。これは、言語内容に焦点を当てるにとどまっている間は話のつながりや流れまで意識することは難しいが、言語機能にも焦点を当てることで、生徒が場面を意識するようになり、まとまりのある内容で話題を膨らませることができるようになったと考える。

以下は3学期に実施した英語学習意識調査アンケートの結果である。「聞くこと」、「読むこと」、「話すこと」、「書くこと」の4技能に関して生徒の意識を確認した。ここでは、「話すこと」の結果について触れてみたい。

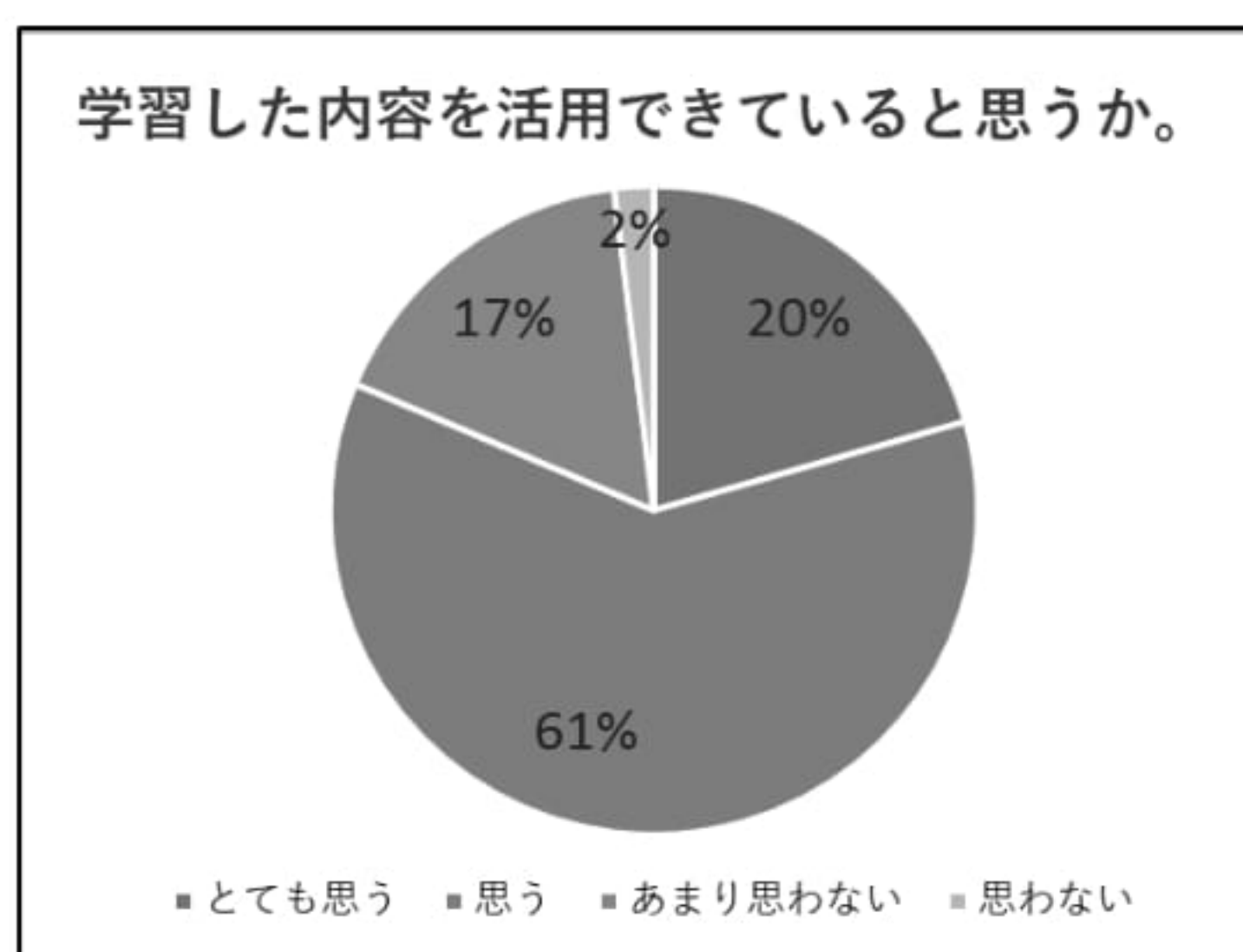


図2 英語学習意識調査アンケート1

図2は「英語を話すときに学習した内容を活用できていると思いますか。」という質問の生徒の回答結果である。8割の生徒が「学習した内容を活用できていると思う。」と回答した。2回目の自己紹介タスクを実施したときの生徒の感想としては、「スライドの量は減ったが、話す量は増えた。」、「いろいろな表現を使って、自分の言いたいことが言えた。」と2回目の自己紹介タスクに自信を示す生徒が多かった。

これらのことから、本研究のテーマである「コミュニケーションにおける英語を活用する力を高める学習指導」としてタスク（Task-Based-Language-teaching）の指導方法は有効的であると考え。また、インタラクションやプレタスクで意識していたことは学習した内容の2度目、3度目の出会いをさせることである。PPP型の授業をしていたと

きは、1回1回の授業が新しい内容で、前に学習したことに触れる機会はほとんどなかった。本研究では、1度学習した内容を、新しい単元に入っても、インタラクションやプレタスクをとおして、インプットやアウトプットの場面で活用するようにしたこと大きな要因であると考え。以上のことが、本研究での成果である。

## ② 課題

本研究の課題の1つ目は、生徒が活用する英語の「質」の部分である。間違いを気にして発話量が減らないように、生徒の英語を話す中での文法の間違いや語彙の間違い、発音などはあまり気にしないようにした。そのため、発話量は増えたが、生徒が使う英語の正確さには今後解決すべき課題がある。特に、英語を苦手とする生徒は正確さを求めすぎると英語を話すことに強い抵抗を示し、話すことを苦痛に感じてしまうことがある。「流暢さ」と「正確さ」のバランスをどのようにしていくかが問題である。

2つ目の課題として、ライティングの部分である。「英語を書く力診断調査」の生徒A、生徒Bのライティングを見てみるとわかるように、あきらかに語数が少ない。「書くこと」は「話すこと」と比較すると、より正確さが求められる。また単語の綴りもここでは生徒の大きな課題の1つである。綴りがわからないから書けないこともある。このように、より「正確さ」が求められるような課題では、英語を思うように活用することに困難を示す生徒もいる。

3つ目は、即興性についてである。本研究で実施したタスクは、単元のはじめに生徒にはどのようなことをするか伝えてある。そのため、タスクに向けて事前に準備をすることができる。発表では用意した原稿などは見ないようにしているが、覚えたことを話している生徒もいるように感じる。学習した内容を即興の中で活用できる力が身についているかどうかは本研究ではわからない部分である。今後、即興的な要素があるコミュニケーションの中で、学習した内容がどれだけ活用できるかを調べる必要がある。

最後に英語学習意識調査アンケートの結果から生徒の「話すこと」に対する課題に触れておく。次の図3および図4はアンケートを集計した結果である。

アンケートからは「英語を話すことの活動は好きですか。」という質問に対する回答は、およそ6割の生徒が「好きである」と答えている。



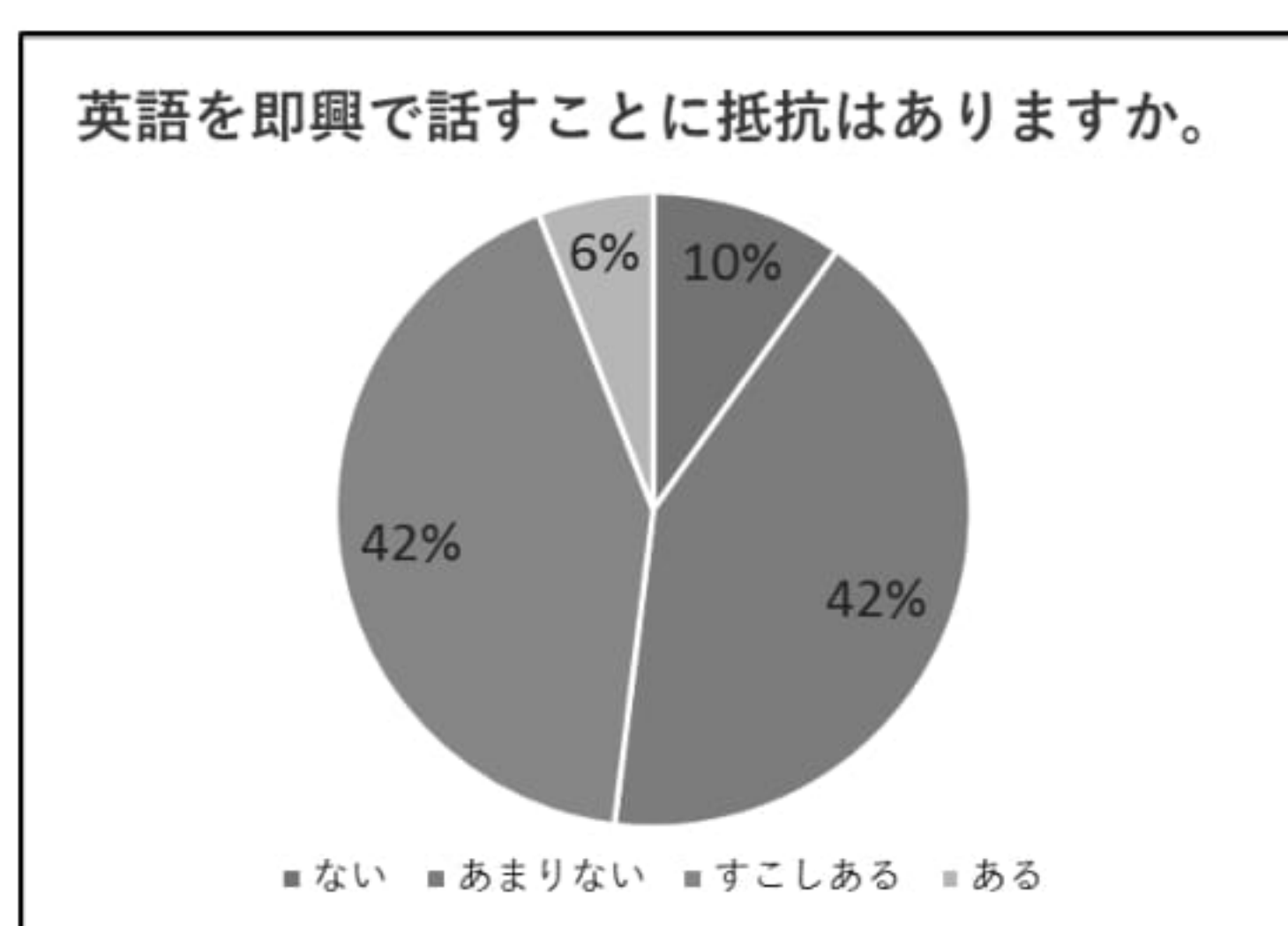


図3 英語学習意識調査アンケート2

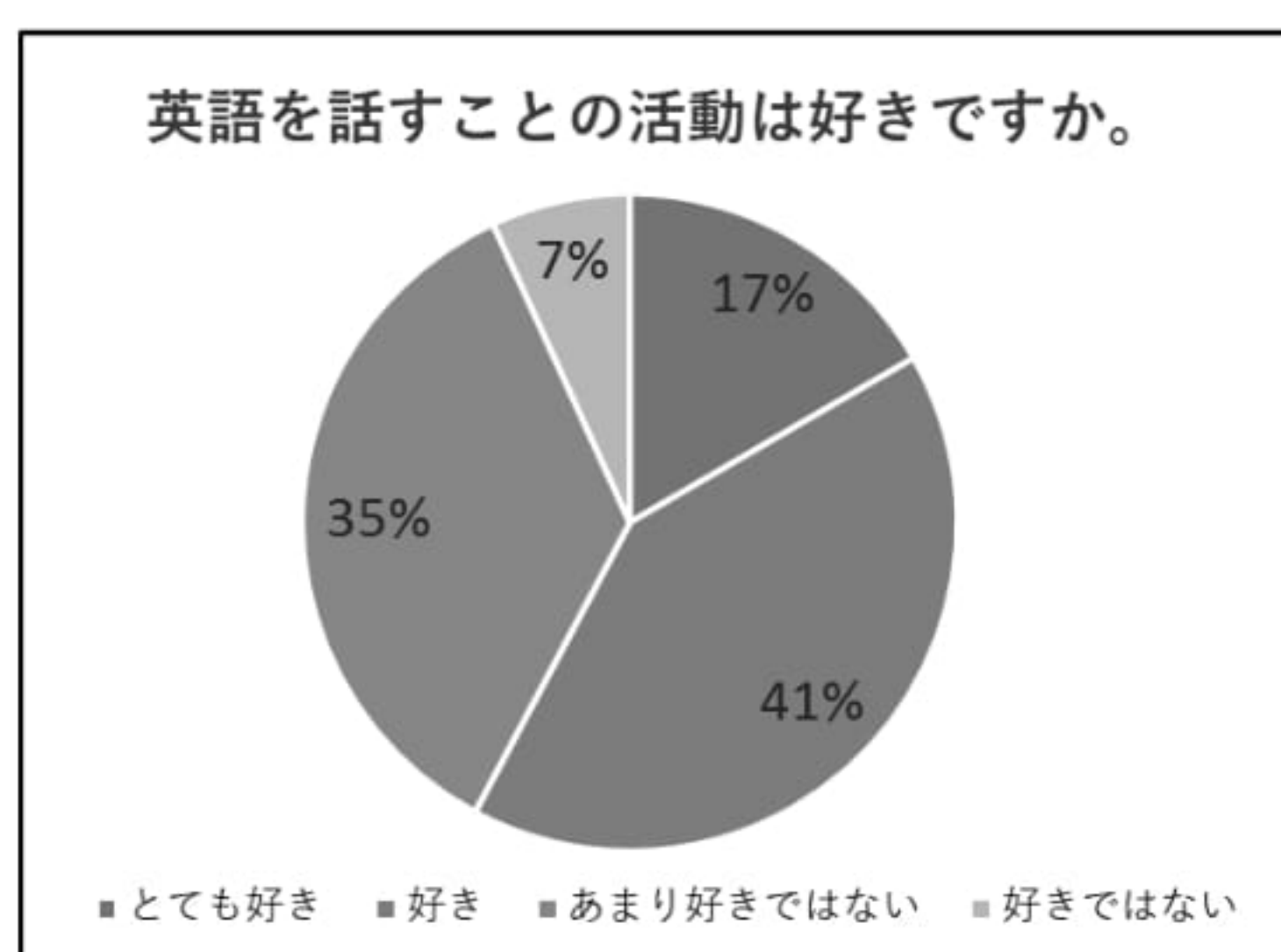


図4 英語学習意識調査アンケート3

また「英語を即興で話すことに抵抗はありますか。」という質問に対する生徒の回答は5割の生徒が「抵抗がない」と答えている。反対に半分ほどの生徒は英語を即興で話すことに何かしらの不安や抵抗があるということである。アンケートでは、その理由も生徒にたずねてみた。以下はそれらの一部である。

- どんなことを話せばいいのかわからない。
- 何を言えばいいかわからない。
- 語順やルールを忘れてしまいがちになる。
- 文法を頭の中で整理できない。
- 即興だと文法を整える時間がないし、単語がすぐに出てこない。
- うまく伝わっているかが心配だから。
- 言いたいことをうまく言い表せないから。
- 課題が話しやすいものでないときがある。
- 話しているときに、次に言う文を組み立てていけないといけないうところに苦手な部分がある。

英語を苦手としている生徒ほど話す内容の部分に課題があると感じ、ある程度の英語力がある生徒は文法や語順といった「正確さ」に課題を感じる傾向にあるように思う。知識を得た分、正確な英語を話さなければいけないというところに意識が働いてい

るのかもしれない。今後はそういった生徒が如何にして、即興で話すことに抵抗を感じないようにするかが課題である。

## 6. 今後の研究について

今後もタスクを活用した授業をし、学習した内容をコミュニケーションの中で活用できる英語力をつける取り組みをしていきたい。また今後は本研究の課題をふまえ、①生徒が使う英語の「質」をあげる取り組みをすること。②即興で英語を使う力を向上させる取り組みをすること。③「話すこと」と「書くこと」、つまり「流暢さ」と「正確さ」の両方に焦点を当てた取り組みをすること。以上の3つをもとに、さらなる研究を進めていきたい。

## 参考文献

- 1)文部科学省「中学校学習指導要領(平成29年告示)解説外国語編 pp7
  - 2)和泉伸一「『フォーカス・オン・フォーム』を取り入れた新しい英語教育」(2009), pp103
- 和泉伸一「フォーカス・オン・フォームと CLIL の英語授業」(2016)
- 松村昌紀「タスクを活用した英語授業のデザイン」大修館書店 (2012)
- 太田洋「英語の授業が変わる 50 のポイント」光村図書 (2012)